

あ、あった。

わたしは学校の帰り道、猛スピードだった自転車の速度を落とす。滲み出す体中の汗に心地良い風を生み出していた力が減少するにつれて、セミの断末魔と紫外線の攻撃が気にかかってくる。

世の中の学生達には待ちに待った夏休みだというのに、受験生にそんなものはない。この夏が天王山だと発破をかけられ、毎日課外授業を受けるためだけに登校している。朝八時半から午後は四時二十分まで計六コマ。それをようやくこなしての、田んぼの畦道だった。

道脇に設けられた小さな地蔵と供えられた果物と菓子。

わたしはじわじわと感じる暑さを無視してじっと見つめた。つま先だけを地面に着いてネイビーの自転車のハンドルを握ったまま、それをじっと見つめていた。

今年も、あった。

去年もあった。その前も、前の年も。

七月二十八日は毎年こんなふうにかんかん照りで、木々は濃い緑色で、稲は水面が見えないくらいに育って、鮮やかな命の色をしていた。アブラゼミなのかミンミンゼミなのか知らないけれど、とにかくうるさい鳴き声がこだまするように響いていて、露出した肌に痛いほどの日光が照りつけていて、シャツは背中にかいた汗が染み込んで湿っていた。

今年もまた、寸分も違わないかと思うほどに情景が酷似する。その中に汗一滴零さずに鎮座している地蔵。赤い前掛けは春の彼岸の時に掛け替えたばかりの物だ。傍らに置かれているバナナ、菓子、缶ジュース、あつらえた供花と誰かが摘んでくれたのだろう手折ったばかりの赤い花。

わたしは再び自転車のペダルを踏んだ。

この暑さにカラスも突つかない。茶色の斑点ができ始めた、くすんだ黄色が場違いだった。

地蔵が立っていたあのすぐ近くで事故があった。高校生が運転していたバイクと小学生が接触し、飛び出した小学生は死んだ。即死だった。十一年前の、七月二十八日。激しい夕立の最中のことだった。

次の年から折ごとに花が供えられるようになった。そして命日には必ず墓に線香も。

供えているのは当時高校生だった、今は大人の男の人。

わたしは誰もいない家に着くと急いでシャワーを浴び、着替えた。冷蔵庫から冷えた缶ジュースを二本取り出して、近くの寺に走った。

赤い屋根の寺の裏山には、古い物から最近建てたばかりの墓石までがびっしりとひしめき合っている。夏場には雑草があつという間に胸丈まで伸びるので、檀家が容赦なく刈り取ってしまう。

暗色の箱がいびつに並び居る景色はどこを見ても同じようにしか見えない。何度も来ているはずなのに、来るたびに様子が変わるものだからどうしても道順が覚えられない。いや、覚える気がないのかもしれない。

私は木が多いために騒がしい虫の悲鳴を聞きながら、行きつ戻りつしてやっと見つけた。

「坂樹さん」

墓石の前にしゃがんで両手を合わせている男の人。この暑いのにきちんとした格好をして、目を閉じて一心に祈っていた。

この墓は、わたしの家の物。

「……葵、さん」

坂樹さんが閉じていた目を開け、見上げて言う。わたしは持っていた缶ジュースの片方を押し付けた。

「本堂で休みませんか。ここは暑いですから」

躊躇する坂樹さんの腕を取り、ほとんど無理矢理に連れ出した。

本堂の脇は縁側みたいに腰掛けられるようになっていた。すぐ近くに椿の木がそびえ立っていて、その少し離れた所に墓参りに来た人が利用できるよう水道があった。行儀良く並べられた手桶と柄杓は、後半月もすればみんなが使い出す。

わたしと坂樹さんはしばらくそこに座っていた。わたしは持ってきたジュースを飲み干してしまっただけで、坂樹さんはまだふたも開けていなかった。

「どうして、ここに」

坂樹さんが缶を手でいじりながら呟いた。

「あそこに花とか置いてあったから、まだここにいるかなって思ってた」

本堂には人気がない。わたしは椿の葉の間から見える水田に目をやった。

坂樹さんが口を開く。

「僕が、あなたのお姉さんを死なせてしまった」

坂樹さんが詰めていた息を吐く。わたしは遠くから目を離さない。一瞬の、ぴりりとした空気。けれども次には坂樹さんの顔をしっかりと見る。そして微笑む。酷く苦しかった。

「十一年ですか。もう忘れていいと思いますよ。ああ、忘れてしまったのはわたしの方ですか」

そう、事故で死んだ小学生はわたしの双子の姉。彩という名前だった。小学校の一年生で、初めての夏休みはたった一週間しか楽しめなかった。

家の近くで遊んでいた時に姉が道路に飛び出し、はねられた。姉は年齢の割にかなりしつかりしていたから、初めはねられたのはぼやっとした性格のわたしだと思われたらしい。

けれど、死んだのは姉の方だった。

わたしは動かなくなった姉をじっと見下ろし、そして倒れていた坂樹さんに気付いて誰かを呼びに行ったと彼本人から聞いた。坂樹さんは姉を避けようと急ブレーキをかけて、夕立で濡れた道路で滑ってバイクごと転んだ。結局、足の複雑骨折と至る所に打撲を負い、その時の後遺症で坂樹さんは今も足を引きずるようにして歩く。

わたしと姉は仲が良く、いつも二人で田んぼの間を走り回っていたらしい。髪型も服装も同じで、でも必ずわたしは姉の後ろをくっついていた。その日も夕立の少し前に家を出て、雨が降ってきたから帰る途中だったのではないかというのが大人達の見解だった。

全てが推測の域を出ないのは、これらの一件をわたしが覚えていないからだ。わたしは全く覚えていないのだ。事故があったことも、自分に姉がいたことも。

医者は、事故を目撃したショックで姉がいたという記憶そのものを消してしまったのだろうと言う。都合の悪い記憶を自分で閉じ込めてしまったのだ。

仏壇に飾られた遺影の中に姉の写真がある。しかしそれは、わたし自身にしか見えない。わたしの写真が飾ってあるのだと思って「どうして」と聞いたこともある。その時、母は「お姉さんよ」と言った。わたしには理解できなかった。

「……許されは、しません。どんなことをしても彩さんが帰ってくることはありません。それで、まだ彩さんを思い出すことはないのですか」

「思い出して欲しいんですか」

坂樹さんはわたしに会うたびに尋ねる。姉のことを何か思い出したか、小学一年生以前

の明確な記憶が戻ったか。

幼い頃の思い出がないわけではない。ただ、ぼんやりとしている。海で泳いだことも、玩具を買ってもらったことも、かまくらを作ったことも覚えている。その時確かに誰かと一緒だった。でも隣で笑っていた人の顔も声も分からない。

そういうもやもやとしたものがあることを家族に話したことはない。中学二年の時、初めて坂樹さんに話した。毎年決まった日に会いに来る青年。家族でも友人でもない存在。だから話せた。

坂樹さんはそれが姉だろうと言った。わたしはそうなのかと思った。けれども、姉と遊んだ思い出は蘇らない。その内に姉のことを思い出す必要はないのではないかと考え始めた。日常生活に支障はないし、もういなくなってしまった姉のことばかり引きずっていても仕方がないと思った。そういうふうに見えるようになった。

何より年に何度も坂樹さんが姉の墓参りをしてきているのを見て、もういいと思った。わたしは何も覚えていないのに、坂樹さんはずっと苦しんでいる。

父も母もわたしも、十分過ぎるほど供養していただいた、もういいですよと伝える。それでも坂樹さんは頑に許されないのだと拒む。

時々坂樹さんのことを思い出しては、どうしてこの人だったのだろうと思う。どうして姉をはねたのが坂樹さんで、姉は簡単に死んでしまったのか。

私は先月で十八歳になった。事故を起こした時の坂樹さんと同じ年。自転車で通う通学路で小学生と擦れ違うこともあるのに、よく分からない。もし今誰かの命を奪うことになってしまったらどうだろうと寝る前に考えることがあるけれど、いつの間にか眠ってしまっていて、目が覚めると日常が始まる。

「わたし、思い出そうとしないことにしました。十年経ったんです。忘れましょう。もう十分です。あなたの人生を潰してしまうことはないんです。」

「葵さん」

坂樹さんは項垂れた。

うつむいたためにあらわになった無防備な項に、一枚の絵のような姿に、やり切れなくなる。

手を伸ばせばすぐに届く距離なのに、坂樹さんとわたしの間には絶対に越えられない壁のようなものを感じていた。わたしはその冷たくそびえる壁に触れ、頬を押し付けてひた

すら呼びかける。いつか、坂樹さん自身がその壁の厚みを紙ほどに薄くしてくれるように。

もし今ここで彼に触れたとしても、何の意味もない。わたしが満足するだけ。坂樹さんは少しも癒されはしない。

「坂樹さん、十分なんです。あなたの人生を生きてください。あなたの気持ちは十分伝わっていますから……」

だから、そんなふうに分を責めないで。

坂樹さんはわたしの言葉に静かに耳を傾けてくれているようにも、逆に全く耳に入っていないようでもあった。

坂樹さんは、その次の年にもやって来た。地蔵の前には花と菓子が供えられている。

そうして、わたしは同じことを言うのだった。

姉のことは思い出そうとしなくなったこと、償いはもう十分だということ。

わたしは坂樹さんが受け入れられるまで言い続ける。せめて、坂樹さんが墓参りに訪れる回数が増えたと少なくなるまで。

早く救ってあげてください。

わたしは道路脇の地蔵に手を合わせて呟いた。けれども、地蔵は穏やかな笑みをたたえて、ただそこにあるだけだった。